

# メディア主導社会における文化に関する考察 ～20世紀末イギリスの社会・フットボール・ポップカルチャー～

An examination of culture in society led by media  
～Through British society, football, and pop culture in the end of 20<sup>th</sup> century～

1K04B216-0

宮内 亮吉

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

## 序章

これからの日本において、スポーツの社会的な地位を確立していくためのロールモデルとして、イギリスは格好の研究対象である。なぜなら、イギリスにおける社会とスポーツ、ポップカルチャーとの関係は非常に密接だからである。さらに、大衆が生み出すポップカルチャーにおいても、社会情勢との関連性が非常に強い。これらの事象は、スポーツやほかの文化が、イギリス国民の日常生活における大きな部分を占めていることを示している。

本研究では、20世紀末のイギリスにおいて、社会とフットボール、ポップカルチャーはどのような関係を築いていたのかを分析してゆく。

## 第一章

1980年代、サッチャー首相は「英国病」からの脱却に向けた政策を打ち出し、一定の成果を収めた。しかし、その経済政策はあまりに急進的で、なおかつ富裕層を優遇したものであったために、労働者階級は苦境を強いられることになった。加えて教育改革による影響もあり、深刻な格差社会が生じ、貧困層の生活水準は劣悪なものとなり、治安が悪化した。

体制への不満は、イングランド・フットボール界におけるフーリガン問題の原因のひとつとなった。1980年代前半までは栄華を誇ったものの、1985年の「ヘイズルの悲劇」以降5年間に亘ってイングランド・フットボールは国際舞台からす形を消すこととなり、冬の時代を迎えた。

格差社会の顕著化は、労働者階級における退廃的な雰囲気助長にもつながり、ザ・スミスによる体制側への皮肉が詰まった楽曲が支持を受けるようになった。また、治安悪化の影響によるドラッグの蔓延は、マッドチェスターという新たなムーブメント誕生の誘因となった。

## 第二章

サッチャーに代わって首相となったメージャーは、東西ドイツの統一や湾岸戦争などの海外における度重なる政局変動もあって執政に苦しんだ。その結果、

イギリス経済は再び経済危機に陥った。

その煽りを受けて、イングランド・フットボールリーグの人気クラブが収益増を目指してリーグを脱退し、新たにプレミアリーグを創設した。その話題性から、プレミアリーグはメディア王ことマードックを筆頭とするテレビ業界や外資の巻き込みに成功し、フットボール・ビジネスが活気を帯びる。

政権が不安定な一方で、労働党の党首には若き才能であるブレアが就任し労働者階級の機運は一気に上昇した。時を同じくして、ロックバンド、オアシスのデビューに端を発したポップカルチャー界におけるムーブメントであるブリットポップが未曾有の規模で盛り上がりを見せた。ブレアはこの潮流を見逃さず、ブリットポップとの共闘関係を構築することで、支持層を拡大していった。

## 第三章

首相に就任したブレアは、従来の保守党や労働党のどちらとも異なった独自の政治指針「第三の道」を提唱した。その政治内容は、格差社会の是正を念頭においたものであり、貧困層の人数を減らし、中産階級の人数を増加させることに成功した。

ブレア政権誕生の立役者ともなったブリットポップ・ムーブメントは、過度の熱狂によって生まれたクオリティ低下と、労働党の成功によって体制側についてしまったことに対する大衆文化の文化的意義を巡るジレンマにより、衰退する。

プレミアリーグは隆盛を誇っていたが、一方では行き過ぎた国際化によって、イングランド内における人材不足が顕著になっていた。その影響で、国際舞台におけるイングランド代表の成績は停滞してしまっただけである。

## 終章

大衆文化には、時代を反映したメッセージが込められている。本研究で扱ったイギリスにおけるフットボールとポップカルチャーとは、まさにその時代において社会と対峙した人々を映し出す鏡であったと言えるだろう。